環境省 地球環境研究総合推進費プロジェクト

「アジア地域における経済発展による環境負荷評価及びその低減を実現する政策研究」

ワーキングペーパー　ＮＯ．９
電子出版日：2007 年4 月2 5 日

中国雲南省者米谷の紹介

国立歴史民俗博物館　　西谷　大

編集・発行：東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
地球環境研究総合推進費プロジェクト事務局

「アジア地域における経済発展による環境負荷評価及びその低減を実現する政策研究」

中国雲南省者米谷の紹介

中国雲南調査グループ

１.中国雲南省者米谷概況

本プロジェクト「アジア地域における経済発展による環境負荷評価及びその低減を実現する政策研究」においては、地域ごとの生態史に着目しながら、生態転換を引き起こす要因、生業転換の程度、その環境影響を記述的に整理することを、第一の目的としている。

調査地である者米谷地域では、9 つのエスニック・グループがそれぞれに特徴のある複合的な生業をおこない自然環境と人間の生業との調和を生み出しながら暮らしてきたと考えられる。ところが中国の急速な経済発展は、経済のグローバル化を促進し、辺境地域であった者米谷地域に大きな影響を確実に及ぼしつつある。それだけなく中国政府主導による環境保護政策によっても、彼らの固有の生業が大きく変容しつつある。

本稿では者米谷地域を重点において、この地域が培ってきた固有の生業の実態を明らかにしつつ、その変容について紹介を試みたい。

調査地である者米拉ラフ族郷と老集寨郷は、紅河州の金平苗族瑤族タイ族自治県（以下金平県）金平鎮の西、およそ 100 ㎞に位置する。金平県は昆明市からみればほぼ真南に位置し、その南側の県境がヴェトナム国境と接している。

老集寨郷と者米ラフ族郷の中央には、者米川が北西から南西に流れ、その周囲に南北の幅がわずか 2～3 ㎞と狭い河谷平野が広がっている。谷の南北には山地が広がっているが、（以下この河谷平野と南北の山地をあわせて者米谷と呼ぶ）。者米川の南が者米拉・族郷であり、北側が老集寨郷であり、東西およそ 40 ㎞、南北およそ 25 ㎞の広さをもつ。

河谷平野の標高はおよそ 500ｍ前後である（写真 1）が、それに対して北側の老集寨郷では標高 1200～1800ｍの山が郷全体に散在し、尾根は者米川に向かって北から南に走る。者米川の南ではヴェトナムとの国境を区切る 2000ｍ前後の脊梁山脈が、西北から東南へ屏風のように連なる。標高 3074ｍの西隆山は、ヴェトナムとの国境にまたがる金平県の最高峰である。

者米谷には、タイ、ハニ、ヤオ、クーツォン、アールー、ミャオ、ジョワン、漢の 8 つの民族とハーベイ人が暮らしている。現在、タイ族の村である上新寨、アールー族の村であるカービエン、ハニ族の村である格馬・高寨・牛籠、ヤオ族の村である梁子寨瑤、クーツォン族である老白寨の 7 つの村で調査をおこなっている。

民族にそって棲み分けがおこなわれており、者米谷の河谷沿いの平地に居住するのがタイ族とジョワン族である。

一方、標高およそ 800ｍより高い尾根上や山の斜面には、ミャオ、ハニ、アールー、ヤオ、クーツォン族が居住している。一般に、ミャオ族の村は標高 800ｍ以下の場合が多いが、ハニ族の村は、およそ標高 800ｍ～1000ｍの範囲に分布するのに対して、ヤオ族とアールー族、それにクーツォン族はさらに高い標高およそ 1000～1400ｍの間に居住する。

ハニ族、アール一族は、棚田でコメを作るのだが、河谷平野と比較すると冬の気温が低いため一期作で、山の斜面で水田の開墾に不適当な急な斜面は常畑にする。ヤオ族もやはり棚田による水田耕作が生業の中心であるが、1500m以上の高地に広がる森林内を利用した藍栽培をおこなっていた。またクーツォン族は、1950 年代以前は、焼畑と狩猟採集が主要な生業であり、水田耕作はおこなっていなかった。

者米谷は東西に長く狭い河谷平野と、その南北に広がる山地からなる複雑な地形を特徴とし、それにあわせて気候も多様である。そして生態的な環境の複雑さが背景となって、それぞれの民族・村の生業も異なる特徴をもっていたといえる。

ところが今、彼らの固有の生業にグローバル経済の影響と、中国政府の環境保護政策によって、伝統的な生業が大きく変容しつつある。

者米谷の生業がどのようなシステムであったかを述べるとともに、現在者米谷で経済のグローバル化や中国政府の環境政策によって引き起こされている生業変化が、彼らの生活にどのような影響を与えるのかを整理してみたい。

２．　者米谷の複合生業体

者米谷は谷の中央を者米川が西から東に流れるが、タイ族の村である上新寨は、河谷沿い（およそ 500m前後）に村を作る。そして彼は、この河川に南から北に流れこむ谷筋の小河川沿いに水田を作る。1970 年代までは水田より高い周囲の山の斜面を焼畑にし、さらにその背後の山の斜面を灌木林として残してきた。

河川沿いに広がる水田では、水が豊富なことと一年を通じて気温が高いため二期作をおこない、一期作目は糯米を植え、これを自家消費にまわし、二期作目は粳米を作り市場で売って現金に換えるか、コメそのものを他の民族との交易ために使ってきた。

者米谷の各民族に共通するのだが、水田はイネの栽培だけをおこなう場ではない。その一つの事例として水田が可食水田雑草の採集の場となってきたことがあげられる（写真 2）。水田内あるいは水田畦畔などの植物は約 130 種あるが、ほとんどはコスモポリタンな植物であり、日本と中国では共通種は 80%くらいあるといわれている。日本では「水田雑草」と呼んでいるがこれは近代農学の立場からの呼び方であり、タイ族の場合は、こうした多様な可食水田雑草のうち、コナギ、オモダカ、ナンゴクデンジソウ、ドクダミとう 4 種類だけを集約的に採取し食する。つまり水田雑草は立派な野菜なのである。

もう一つの特徴は、水田内で棲息しているドジョウとタウナギを捕る水田魚撈をおこなうことである(写真 3)。水田魚撈は、農作業が終わった夕方にウケをしかけて朝ウケを回収するという農作業に支障がでない時間帯におこなわれ、一回で家族のおかずが十分にまかなえる量を捕ることができ、余れば市で売ることで現金収入にもなる。またタイ族の女性にとって結婚相手を選択するもっとも重要な条件は、男性の水田漁撈または河川漁撈の腕前の高さである。つまり女性にとって動物性タンパク質を日常的かつ確実に手に入れてくれる、食料獲得能力の優れた男性ほど結婚相手としての魅力が高い。

このようにタイ族にとっては水田という場所は、稲を作るためだけの存在ではなく、魚撈や採集が　水田に内部化されており、タンパク質や野菜の重要な供給源になっているといえる。

水田より高い山の斜面では、1970 年以前は焼畑になっていた。ここではトウモロコシ、豆類、キャッサバなども栽培していたが、むしろ主として綿を植えていた。後でのべるが、タイ族は、綿から糸と紡ぎ綿布を織るのだが、これから服を作るだけでなく、他の民族と交易するさいの重要な商品になってきた。

者米谷の北側斜面で、海抜およそ 800～1300mに住むのがアール一族である。彼らは景観的には、者米谷の 9 つの民族のなかで最も壮大な棚田を作り、しかも写真でみるような棚田をわずか 4～5 年という短期間で作りあげる技術をもっている（写真 4）。尾根から斜面に作られた棚田におとす水は、5～10 km離れた水源から引いてくるのだが、水は常に不足状態であり、分水木という木に抉りをいれた道具を何百と使って徹底した水管理をおこない、一枚ごとの田に公平に水を配分する精緻な灌漑システムを作り上げている（写真 5）。

ところがタイ族の村では日常的におこなわれてきた水田漁撈や可食水田雑草の採集はほとんどおこなわないし、コメは自家消費分を作っているにしかすぎない。むしろ彼は畑作が生業の中心である。棚田の上下に広がる山の斜面を畑に開発し、耕作地のローテーションをおこないながら、陸稲、トウモロコシや、野菜を栽培してきた。

者米谷の南斜面で、海抜およそ 1000～2000mの土地を利用するのがヤオ族である。ヤオ族は中国南部から東南アジアにかけて山中を移動しながら暮らしてきたことで知られている。者米谷にやってきたのも 20 世紀の初めと他の民族と比較すると遅い。彼らはまず焼畑をおこないながら土地を拓き棚田を作ってきた（写真 6）。

彼らもやはり棚田をつくるが、自家消費分しか作らない。しかも可食水田雑草は採集するのだが、水田漁撈はほとんどおこなわない。むしろ村の周囲や、ヴェトナム国境沿いに広がる原生林内での野生動物狩猟や有用植物採集、それに藍の栽培に重点をおいてきた。

このように 3 つの民族は、棚田で水田稲作をおこなうことは共通するが、水田を他の生業との関係性でみるとその特徴はまったく異なる。タイ族は水田によるコメ栽培に特化し、畑作はほとんどおこなわず、他生業が水田に内部化し、水田の維持管理も村を単位として共同的である。アール一族は、もっとも厳密な管理をおこなうのだが、生業の中心は、水田よりもむしろ畑作であり、水田に他生業は内部化しない。ヤオ族は、水田を村という単位ではなく個人で管理し移動的に利用しつつ、水田よりもむしろ森林利用に卓越している。

者米谷は複雑な地形を特徴としとおり、3 つの民族は、海抜およそ 500m前後の河谷平地から 1300mにかけての山斜面に、高さを変えて住む。それぞれの村の周囲の生態的な環境は異なっており、そのことがタイ族の水田への特化、アール一族の畑作重視、ヤオ族の森林利用の卓越差という、3 つの民族の生業システムの相違を生み出す要因になっている。

しかし各民族の生業システムに差異が生じる背景として、生態的な環境とは異なるもう一つ別の要因も存在すると考えられる。それは各民族間でおこなわれてきた交易と密接に関わっている。

者米谷では、河谷平地の町で 6 日ごとに 1 回、定期市がたつ。市では各民族が、それぞれの生産物をもちより交易をおこなってきた（写真 7）。例えばタイ族の主要な商品は、コメと綿布である。1950 年代以前では、余剰米を生産できるのは唯一タイ族だけであった。他の民族は、コメは自給しておらず、タイ族はコメで他の民族からさまざまな商品を買うことができた。またタ者米谷のブタ肉の流通も独占してきた。

一方、アール一族は、山の斜面の畑で盛んに野菜を栽培し、それを他の民族との交易の

商品としてきた。そしてヤオ族は木綿布を染めるのに必要な藍を売って生計をたててきた。
　各民族は戦略的に特産物を作り出し、6 日ごとの市は、それらを交易する場として機能してきた。つまり者米谷という一つの地域が市を介することで、自給自足的な一つの生活世界の形成を可能にしてきたといえる。いわば多民族の住む者米谷という一つの地域が生業複合体を形成し、さらに各民族の生業戦略は市を介することで、より差別化が促進されてきたといえる。

３．生業変化と化学環境の転換

　現在、者米谷の生業は大きく変容しつつある。そのきっかけは、中国政府が 1980 年代に入ってからはじめた開放政策と、生産請負制によって、山の斜面の畑では換金作物であるパラゴム、レモングラスが導入され、河川敷の畑ではトウガラシ、スイカなどが植えられるようになる。また水田では在来種にとってかわり、収量の増加が期待できるハイブリッド米が栽培されるようになる。
　者米谷では 1970 年代以前は、化学肥料や農薬はほとんど使用されていなかっただけでなく、便所はなく人糞の使用もおこなわれていなかった。また除草はもっぱら人手に頼って、除草剤も使用されなかった。
　ところがハイブリッド米は、彼ら栽培してきた在来種とは異なり、水と化学肥料を必要とする品種である。またパラゴムやレモングラスなどの収量を増加させるために、農薬や肥料が盛んに使用されるようになる。
　さらに 2003 年から、雲南省内だけでなく、四川、広東省などかのバナナ業者が、タイ族と村人と契約を結び、水田でバナナ畑に栽培するようになる。わずか 3 年で河谷平野沿いのタイ族の水田は、すべてバナナ畑に転作してしまった。バナナ畑でも大量の化学肥料と農薬が使用されている。
　者米谷に居住するそれぞれのエスニック・グループは、自然環境の相違を生業戦略に結びつけ特産品を生み出すことで、者米という一つ地域内で生業複合体を形成してきた。そして生業の差異を定期市に結びつけた内発的な経済によって、自然環境と人間の生業との調和を生み出し、そのことが自然環境の多様で持続的な利用につながってきた。
　ところが近年の世界規模での急激な市場経済化は、彼らの生業形態を急速に変貌させているだけでなく、農薬や化学肥料の大量の使用によって、者米谷の生活環境そのものを根底から変容させつつある。
　者米谷は多様な生態的な環境を、多様な民族が共有することで、一つの地域が生業複合体を形成し、そのことが自給自足的な生業を成立させてきた。いわば世界の縮図のような場所なのだが、今その生活世界は生業が変化しているだけでなく、化学環境そのものも劇的に変貌しつつある。そのため者米谷の生業とその変容を各民族・村単位で分析することで、生業と化学環境転換との相互関連性を明らかにすることが可能であると思われる。

写真：

写真１：者米谷

写真２：水田での可食水田雑草の採取

写真３：水田漁撈

写真４：アール一族の棚田

写真５：分水木を使った灌漑システム

写真６：ヤオ族の棚田と田植え

写真７：６日ごとの定期市